

平成27年度 多賀町立博物館

研究発表会

Taga Town Museum Research Meeting 2015-2016

講演要旨集



カレンフェルトで休むアキアカネ (*Sympetrum frequens*)

2016年3月21日

会場：あけぼのパーク多賀大会議室

平成27年度多賀町立博物館研究発表会

- ★発表時間は講演 15分、質疑応答 5分です。円滑な進行にご協力をお願いします。
- ★会場および館内は禁煙です。喫煙は屋外の喫煙スペースをご利用ください。
- ★会場に設置してある機器には触れないようお願いします。
- ★お茶をご用意しておりますので、休憩時にご利用ください。

発表演題

13:00~13:20

御池岳の山岳池にトンボを追う！

牛島积広（滋賀虫の会）

13:20~13:40

お多賀ごぼうの復活をめざして

中川信子（桃原プロジェクト）

13:40~14:00

多賀工場動植物図鑑について

山田雅和（積水化学工業株式会社多賀工場）

14:00~14:20

多賀町におけるニホンザルの行動域
調査の現状

一円憲一（多賀町産業環境課）

14:20~14:40

米原高校地学部による調査・研究活動
その1：最終氷期の古環境復元

～伊吹・霊仙山系における
植生の垂直分布の変化～

西澤江里・近藤凌平・吉田結哉・山田直人
小林晃啓（滋賀県立米原高等学校地学部）

その2：木星の表面模様を探る

宇根恭人・大輪紗也加・小倉匠翼・大城悠斗
（滋賀県立米原高等学校地学部）

14:40~15:00

多賀町古代ソウ発掘プロジェクト
周辺の地質

～特に基盤岩類の分布について～

小早川隆・但馬達雄（多賀町立博物館）

（15分休憩）

15:15~15:35

多賀大社参詣曼荼羅図に描かれた
曲舞車（くせまいぐるま）について

山口正明（近江猿楽多賀座付属芸能研究所）

15:35~15:55

琵琶湖のクロモは2種類いる？

川畑幸樹（多賀町立博物館）

15:55~16:15

滋賀県のテイカカズラとケテイカ
カズラ ～ケテイカカズラの北限は
何処か？～

上町あずさ（京都府立大学大学院生命環境科学
研究科）・福井亘（京都府立大学大学院生命環
境科学研究科）・村長昭義（彦根自然観察の
会）・森小夜子（彦根自然観察の会）

16:15~16:35

鈴鹿山脈で新たに確認された植物
～鈴鹿山脈における

『滋賀県植物誌』以降の新知見～

村長昭義（彦根自然観察の会）

池本義雄（滋賀植物同好会）

16:35~16:55

鈴鹿山脈におけるツキノワグマの生
息情報に関するレビュー

阿部勇治（多賀町立博物館）

多賀町立博物館

TAGA TOWN MUSEUM

〒522-0314 滋賀県犬上郡多賀町四手976-2

TEL:0749-48-2077 FAX:0749-48-8055

http://museum.tagatown.jp E-mail:museum@town.taga.lg.jp

御池岳の山岳池にトンボを追う！

牛島 釈広*

滋賀県のトンボは琵琶湖博物館共同研究の一環として1990年代に滋賀県全域で調査がされた。現在、2012年から「2010年代の滋賀県のトンボ類の分布に状況に関する研究」(以下、滋賀県のトンボ調査2)が約20年後の追跡調査として行われている。

「滋賀県のトンボ調査2」では平野部や丘陵地帯での記録の蓄積は多くあるが、山間部や山岳池の記録は少ない。そこで、滋賀県の山でも山岳池が多く存在する、鈴鹿山系御池岳においてトンボ調査を行った。

調査は2006年11月、2014年9月、2015年8月の3回実施した。成虫は目視または採集、幼虫、抜殻は採集し、標本にして同定を行った。

調査では9か所の山岳池、日本庭園とよばれる山頂付近の草地、登山道沿いの落葉広葉樹林を調査した。

御池岳では16種1187個体のトンボ類が確認された。最も多くの個体が確認された種はアキアカネで1052個体であった。避暑の場所として稜線や山頂付近の草地を利用していた。希少な種では滋賀県レッドデータブック2010で希少種に選定されているコノシメトンボが確認された。山岳池で交尾が確認され繁殖場所として利用していることが示唆された。ルリボシヤンマ、オオルリボシヤンマ、タカネトンボといった山地性の種の確認もあった。

比較的面積が大きく開放的な水面がある元池、真の池でトンボの種数が多くなった。樹林内の閉鎖的な環境の小さな池はトンボの種数は少なかったがルリボシヤンマ、タカネトンボが確認された。

トンボの種によって、利用環境が異なっていることが示唆された。

*滋賀虫の会

「お多賀ごぼう」の復活をめざして

中川信子*

多賀町桃原（もばら）には、江戸時代から栽培されていたごぼうがありました。明和2年（1765）「江差三郡録」に「お多賀ごぼう」の名で記されており、年の瀬の京都市場でなくてはならない品物だったそうです。「お多賀ごぼう」は「桃原ごぼう」ともいわれます。

桃原はカルスト台地の石灰岩が長い年月の間に溶け出してできた赤土の粘土質の土壌です。きめの細かい上質のごぼうが育ち、明治末期で133トンの生産量を誇ったそうですが、時代の流れの中、過疎高齢化が進み、担い手不足と、作業の大変さから30年前くらいに栽培が途絶えてしまいました。

2014年滋賀県と多賀町とJA東びわこがお多賀ごぼう復活の取り組みを始めたのをきっかけに、2015年春、桃原プロジェクトを立ち上げ「桃原を桃源郷に！」を合言葉に活動を始めました。5月に蒔いたごぼうは11月に収穫することができました。歯切れのいい味わいのあるごぼうに、今後の期待がふくらみます。

ごぼうは日本人にとって大切な食材であり、最近話題になっているごぼうの効用なども紹介し、今なぜ桃原のごぼうが貴重なのか、地質や歴史から考えます。

自然に恵まれた多賀町の魅力を生み出す「土」と「水」。歴史と文化を知る機会になる「桃原」。かつてスキー場としてにぎわった桃原が、お多賀ごぼうの復活でにぎわうことで中山間地の可能性をさぐります。



*桃原プロジェクト

多賀工場動植物図鑑について

山田 雅和*

「生物多様性という言葉をよく聞く様になったけど具体的には何を意味するの？」企業の環境担当になり「生物多様性」と言っているけど、「工場周辺にはどんな生き物がどの位居るのか」そんな単純な疑問から、工場周辺の動植物の写真を 1 年間撮り「多賀工場動植物」としてまとめてみました。多様性を考えるきっかけになれば幸いです。

1,弊社について

弊社は 1947 年プラスチックの成形・加工メーカーとして産声を上げました。多賀工場は 1999 年に積水フィルムの工場として設立、2008 年に高機能プラスチックカンパニーの直轄工場として移管を受け、現在従業員約 250 人にて最先端を行く T I 関連製品の主力生産工場として活動しております。

2,植物図鑑について

・ 図鑑の見方

図鑑は季節（春夏秋冬）に分け、写真を撮った時期で動植物を振り分けました。動植物は昆虫、動物、植物と分類し、わかりやすい様に背景を色分表示しています。

・ 調査方法

調査は 2014 年 4 月から 1 年間として、エリアは工場敷地内及び外周と工場周辺（あけぼのパーク付近及び周辺の田んぼ）としました。カメラを手に散策、見つけた時に写真を撮り記録しました。同定は知識の向上も兼ね 1 週間単位で通常業務の合間に名前を確認、仕上げる時（2015/4～）に再度名前と特性を調べました。

*積水化学工業株式会社多賀工場

- わかったこと

1年間の調査で137種の動植物の写真が撮れました。工場敷地内ではケリ等の子育ても見られ、新しい命が育まれる大切な場所であることも改めて認識されました。一方、植物は22種類が外来種であり、緑が多い自然豊かな多賀と思っておりましたが、人間による生態系の変化がいつのまにか気づかずに起きていることも実感しました。アカトンボは季節を通じて観察出来ましたが、いざ分類してみるとたくさんの種類があり多様性の奥深さも感じました。意識しなければ気づかないたくさん生き物と同じ空間を共に生きていること改めて認識し勉強させられました。

- 今後について

動植物の調査は環境変化の指標とし大切なものの一つと認識しています。今後も定期的（2～3年／回）に実施する予定です。可能であれば地域の皆さん一緒に調査できれば楽しいなと思っています。活動にご協力頂ければ幸いです。

多賀町におけるニホンザルの行動域調査の現状

— 円 憲 —*

ニホンザルの行動域調査は平成 23 年度から今日に至るまで本格的に実施されてきた。多賀町のニホンザル（以下、「サル」という。）は行動域を広めつつ、人馴れ度も高くなり、『人を怖がらない』という傾向になってきているといえる。里で見かけるサルは大別して集団で出没する『群れ』と 2 頭以下で出没する『ハナレ』として 2 区分できる。多賀町では群れの中の一頭に発信器を取り付け、その発信器を装着した群れの行動を追跡することができ時系列的に行動域を特定することができる。その群れの数 は 9 群に及んでいる。

過去からの行動域データを分析するとその群れのルーツが見えてくる。敏満寺群、富之尾群及び桜峠群は多賀 F 群から分裂し、霜ヶ原群及び川相群は多賀 B 群からの分裂だと推測できる。また、その分裂タイミングは群れの目撃頭数が 50 頭以上（その時の群れの実頭数は 100 頭近くだと想定できる。）に達した時だといえる。

サルは一定の学習能力を持ちリーダー的行動をとるメスザルを中心に群れで行動・生活している。近年、サルの群れの出没頻度は増加傾向にあり、里での被害も多くなってきている。中でも、高齢化世帯の家庭菜園被害が目立ち、その人たちの楽しみ・生きがいを奪ってしまうという“精神的被害”ともいえる状況が多く見られる。

里の栄養価の高いものを食し、出生率が高くなり、必然的に群れの頭数が多く分裂時期も早まる。群れの頭数が大きくなると、本来の生息地ではエサとなるものが不足し、やむなく、生きていくために里に下りてきて食べ物を探し求める。この悪循環の成立状況が現状であるといえる。

*多賀町産業環境課（臨時任用職員）

米原高校地学部による調査・研究活動

①最終氷期の古環境復元 ～伊吹・霊仙山系における植生の垂直分布の変化～

(西沢江里・近藤凌平・吉田結哉・山田直人・小林晃啓)*

動機 私たちはここ数年、河岸段丘などの調査により最終氷期(約 3 万年前)に飛来してきた始良 Tn 火山灰を見つけてきた。そこでこの火山灰が飛来してきたころの環境はどのようなものであるかという疑問から本研究を始めた。

目的 霊仙山を中心とする滋賀県の様々な地点で始良 Tn 火山灰と花粉化石を採集し、花粉化石から植生を調査し古環境を推測すること。

結論

1. 伊吹・霊仙山系の植生の垂直分布

伊吹・霊仙山系における針葉樹林帯の下限はおおよそ標高 300m 付近であることが分かった。また、現在の針葉樹林帯の下限が 1500m と書かれていることから最終氷期の針葉樹林帯の下限は現在の針葉樹林帯の下限よりも 1200m 低かったと考えられる。よって、2500m と書かれている森林限界線も同様に 1200m 低かったとすると、標高 1377m の伊吹山山頂はその上部にあったと考えられる。

2. 当時の米原市付近の古環境

ケッペンの気候区分より標高 300m 付近を針葉樹林帯＝亜寒帯気候の下限とすると、この近辺の最寒月平均気温が -3°C と考えられる。彦根付近はそこから 200m 低いので気温減率を考慮すると $1\sim 2^{\circ}\text{C}$ 気温が高くなる。このことから彦根付近における最寒月平均気温は $-1^{\circ}\text{C}\sim$

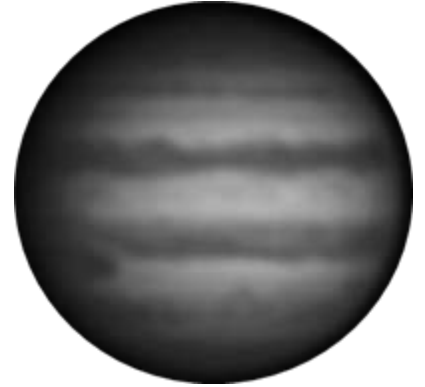
-2°C となり、現在の彦根の1月の平均気温は約 3°C であることから、最終氷期の最寒月平均気温が $4^{\circ}\text{C}\sim 5^{\circ}\text{C}$ 低かったといえる。

*滋賀県立米原高等学校地学部

②木星の模様を探れ！

(宇根恭人・大輪紗也加・小倉匠翼・大城悠斗) *

私たちは、木星の模様を調べるために学校の設備を駆使し、これまでよりも鮮明な画像を得たいと考え本研究を行った。そこで、まず木星を鮮明に撮影できる機材の組み合わせを見つけることから始めた。その結果、本研究では明暗の大きさの違いによって評価基準を設けた上で比較すると、 $\mu-180$ を使用しリレーレンズ方式で撮影した画像がより鮮明だと分かった。LRGB 合成をした画像は、合成時に木星の表面模様が合致しなかった。考察として、30cm 反射望遠鏡で差異が見られた要因としては光軸がずれているのではないかと考えられる。また、 $\mu-180$ で模様にずれが生じてしまったのはフィルター交換に時間がかかりすぎてしまったためだと考えられた。



$\mu-180$ でリレーレンズ方式で撮影した木星

*滋賀県立米原高等学校地学部

「多賀町古代ゾウ発掘プロジェクト」周辺の地質

～特に基盤岩類の分布について～

小早川隆*・但馬達雄*

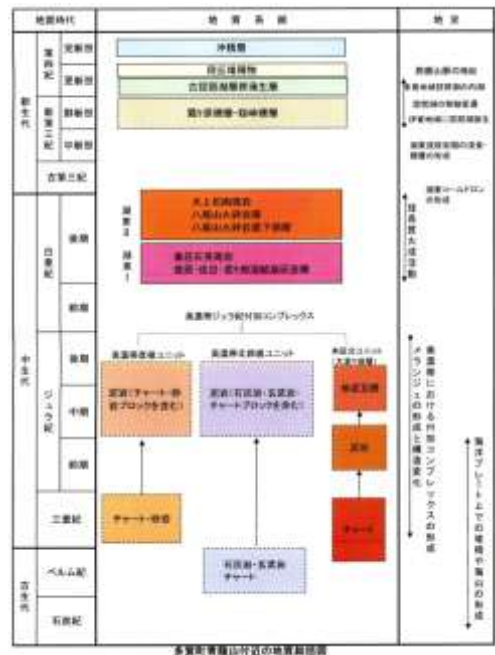
2013年に多くの方々の協力を得て始まった「多賀町古代ゾウ発掘プロジェクト」は3次の発掘まで終わった。プロジェクトの象徴である「古代ゾウ」はまだ見つかっていないが、当時の自然環境を推測させる多量の植物をはじめ貝、魚、昆虫、鹿など約千点の化石が収集された。現在、今春に予定している4次発掘の準備を進めているところである。



今回の報告は発掘現場の古琵琶湖層の基盤である周辺の地層・岩石の調査で分かってきた事柄や課題について紹介するものである。

■ 多賀地域の地質

1976年、地質調査所は彦根東部地域の地質研究報告により、約7000万年前（白亜紀後期）に滋賀県に火山活動があったことを明らかにし、多賀町をその模試地とした。その後、湖東地区の地学の教員により南部の御在所山地域へと調査が進められ、弧状に貫入する犬上花崗斑岩と周辺の地層の分布から湖東コールドロンを提唱した。発掘現場の後背地はその犬上花崗斑岩が広く分布し、かつ湖東コールドロンの北縁でもある。2014年「胡宮神社社務所庭園保存管理計画第2章第1項自然環境（2）地形及び地質」を作成するに当たり、周辺地域の地質を再び調査した。



地質図を作成するに当たっては、「彦根東部地域」や「御在所山地域」の地質図を参考にしたが湖東流紋岩類の分布などを修正した。また、中古生層の地質系統については近年の美濃帯の研究や周辺の地域地質研究の報告書を参考に表記した。さらに、御在所山地域で発見された鈴鹿山脈稜線の礫層を桜峠や霜ヶ原に分布する礫層に対比させ、かつ従来表記されていなかった多賀断層を加筆した。

* 多賀町立博物館

多賀大社参詣曼荼羅図に描かれた曲舞（くせまいぐるま）について

山口 正明*

1、参詣曼荼羅とは

中世後期の16世紀から近世初期の17世紀初めにかけて流行した宗教画。

現在、全国40以上の寺社に残っており、18世紀以降に制作された作品も含めると150点近くになる。滋賀県では、多賀大社・竹生島・長命寺の3カ所に残されている。

参詣曼荼羅の特徴は、聖地・霊場を巡礼、参詣する人々の姿を大勢画面の中に描いていること。参詣曼荼羅を見る人々は、画面の中に自分の姿を投影する気持ちになったことであろう。

さらに、参詣曼荼羅は周辺の名所旧跡も描いており、今の観光ガイドブック的役割も持っていた。

2、多賀大社参詣曼荼羅とは

中世後期以降、神仏融合であった時代、坊人と呼ばれる僧侶がいた。かれらは、近江の国内、国外への布教活動を熱心に行った。坊人は、この参詣曼荼羅を信者の家々に持参し、礼拝用の本尊として掲げその前で護摩祈祷を行った。さらに坊人の中には、この参詣曼荼羅を携帯し、その描かれた世界を信者に説明する「絵解き」と呼ばれる活動を行い、多賀信仰を各地に深く浸透させるのに貢献した。この参詣曼荼羅には折りすじの跡が縦横に見られるが、坊人たちが、折りたたんで携行していたことを裏付けている。

参詣曼荼羅には、本殿をはじめ拝殿、末社などの建物はもちろん、様々な姿で参

*近江猿樂多賀座付属芸能研究所

詣する人々、門前町の家並み、お渡りの様子、周辺の敏満寺、胡宮、大瀧神社まで描かれている。

参詣曼荼羅は、多賀信仰を広めるための必須のアイテムであったと言える。

多賀大社参詣曼荼羅は現在三点伝えられている。安土桃山時代後期の作が二点あり、一つは東京都のサントリー美術館所蔵、一つは多賀大社所蔵である<以下、古本と称>。もう一点は、江戸時代初期の作で多賀大社所蔵である<以下、新本と称>。(参考図①、②)

3、多賀大社参詣曼荼羅にのみ描かれた「曲舞車」と芸能

多賀大社参詣曼荼羅の古本、新本、さらにサントリー美術館所蔵本の3本に共通に描かれている舞台がある。今日の「山車」の様な背の高いものではないが、屋根があり、車が付いている。古本ではその舞台上で「三番叟」を、新本では「翁」を演じていると見て取れる。

鎌倉時代後期から南北朝時代にかけて大変流行した芸能に「曲舞」(久世舞の表記もある)がある。叙事的な詞章を鼓に合わせてリズムカルに歌いつつ舞う芸態であったようだ。女曲舞の名手であった乙鶴という人物から観阿弥はこの曲舞を学び、大和猿樂の中に取り入れていったことは有名である。京都の祇園御霊会や東大寺の御霊会などでこの曲舞が曲舞車と呼ばれた舞台上で演じられている。

多賀大社参詣曼荼羅に描かれた舞台はこの曲舞車である。(参考図③、④)

—参考文献—

大高康正「参詣曼荼羅の研究」(岩田書院)・「多賀曼荼羅の世界」(多賀大社)
杉山あずさ「多賀大社参詣曼荼羅の考察」(近江猿樂多賀座20周年記念誌)

琵琶湖のクロモは2種類いる？

川畑 幸樹*

はじめに

琵琶湖の優占種の一つであるクロモ *Hydrilla verticillata* (L.f.) Royle. (トチカガミ科) は、全国的に分布する在来沈水植物である。国内には殖芽を形成する雌雄異株 (2or3 倍体) と塊茎を形成する雌雄同株 (3 倍体) の2系統が存在し、雌雄異株のみが結実する。以前から、琵琶湖のクロモには外部形態が異なる2タイプが存在すると言われていたが、具体的な比較・研究はされて来なかった。

実験方法・結果・考察

その外部形態の差異が越冬芽の違いによるものであると仮定し、単植と混植の栽培実験を行った。単植実験の結果、シュート長やシュート数に差異があり、越冬芽の差が外部形態の差であることが明らかになった。また、混植実験の結果より、混合群落内では殖芽タイプが上部に卓越し、塊茎タイプを被陰することで生育を抑制することが明らかになった。加えて、野外では稀であるとされている結実が殖芽タイプで多く確認された。

結論

琵琶湖に生息するクロモには外部形態の異なる2タイプが存在し、その差異は繁殖体タイプの違いに起因することが明らかになった。また、条件さえ整えば盛んに結実することも明らかになった。



* 多賀町立博物館

滋賀県のテイカカズラとケテイカカズラ

～ケテイカカズラの北限は何処か？～

上町あずさ*・福井 亘*・村長昭義**・森 小夜子**

テイカカズラ類は主にアジア南東部に自生するキョウチクトウ科のつる性木本植物である。日本国内にはテイカカズラ (*Trachelospermum asiaticum* (Siebold et Zucc.) Nakai) が岩手県以西に、ケテイカカズラ (*T. jasminoides* (Lindl.) Lem. var. *pubescens* Makino) が近畿以西に、オキナワテイカカズラ (*T. gracilipes* Hook.f. var. *liukuense* (Hatus.) Kitam.) が屋久島以南および小笠原諸島に分布している。また、これまでの研究により、国内でテイカカズラとケテイカカズラが自然交雑していることが示唆されている。

滋賀県内ではテイカカズラの自生は多くみられるが、ケテイカカズラはこれまで確認できておらず、文献上の生育記録も滋賀県植物誌 (北村四郎・1968) に標本1点の記載があるのみである。今回、県内においてケテイカカズラの形態的特徴を持つ6個体を確認したため、詳細な形質調査を行った。その結果、野洲市でみられた1個体はケテイカカズラの形質を示した。残る5個体はケテイカカズラとテイカカズラの双方の形質を併せ持ち、両種間の雑種であることが示唆された。雑種とみられる個体が確認された最北の地点は近江八幡市であった。

テイカカズラとケテイカカズラの識別形質

種	がく片長 (mm)	花筒狭部長 /花筒長 ^a	花冠裂片 の色	花喉部 の色	花筒部の色	葯の位置	がく片の 形状	花部の毛			葉裏面 の毛
								花喉部	がく片	花柄・ 花序軸	
テイカカズラ	1.3-3.6	0.61-0.68	白～淡黄	黄～橙	黄～橙	花喉部から のぞく	開かない または 少し開く	無し または 少し有り	無し	無し	無し
ケテイカカズラ	3.7-4.8	0.33-0.49	白	乳白～黄 黄緑	乳白～黄 淡黄緑～黄緑	花喉部から 出ない	開くまたは 開き反り返る	有り	有り	有り	有り

a: 花筒長に対する花筒狭部長の比

* 京都府立大学大学院生命環境科学研究科 (uemachi@kpu.ac.jp)

** 彦根自然観察の会

鈴鹿山脈で新たに確認された植物

～鈴鹿山脈における『滋賀県植物誌』以降の新知見～

村長昭義*・池本義雄**

鈴鹿山脈において確認された植物のうち滋賀県植物誌（北村四郎 1968）に記録されていない植物

- *滋賀県側に限定 *外来種を除く *市町名は旧市町村名で表記
- *貴重種（希少種以上のランクもしくはそれに準ずるもの）については産地未記載

1 新種（新分類群）として発表されたもの

コトウカンアオイ（多賀町・甲良町・秦荘町・永源寺町・日野町）

Asarum majale T.Sugaw. (2006)

スズカマムシグサ（多賀町・永源寺町・日野町）

Arisaema pseudoangustatum Seriz. var. *suzukae* Seriz. (2014)

モイワラン

Cremastra aphylla Yukawa (1999)

クロヤツシロラン（多賀町・秦荘町）

Gastrodia pubilabiata Sawa (1980)

スズカボタン（仮称）（多賀町・彦根市・米原町・山東町） 未発表

Chrysosplenium sp.

オオキンミズヒキ（多賀町）

Agrimonia noguchii Seriz. (2008)

コミソソバ（彦根市・多賀町・甲良町・秦荘町・八日市市）

Persicaria mikawana Hanai et Seriz. (2008)

ニシミソソバ（多賀町・永源寺町）

Persicaria hassegawae Hanai et Seriz (2008)

ホクリクタツナミソウ（各地）

Scutellaria indica L. var. *satokoae* Wakasugi et Naruh. (2004)

*彦根自然観察の会

**滋賀植物同好会

2 新たに確認されたもの

マツザカシダ

ヒガンマムシグサ

ヒロハテンナンショウ（多賀町・永源寺町・日野町）

カントウマムシグサ（多賀町・永源寺町・日野町）

ヒメザゼンソウ（多賀町）・・・・・・南限は比良か京都府

ヒナノシャクジョウ（多賀町・秦荘町・湖東町）

ホンゴウソウ

マメツタラン

キンセイラン

ユウシュンラン

ササバギンラン

マヤラン

イチヨウラン

エソスズラン

ホクリクムヨウラン（多賀町）

アオフタバラン

イイヌマムカゴ

ヒトツボクロ

ギョウジャニンニク

オオキツネノカミソリ（多賀町・山東町）

ミズギボウシ（各地の湿原）

ベニバナヤマシャクヤク白花品種

ミヤコミズ（多賀町）

イイギリ（永源寺町）

シオジ（永源寺町）

鈴鹿山脈におけるツキノワグマの生息情報に関するレビュー

阿部勇治*

これまで、鈴鹿山脈におけるツキノワグマ (*Ursus thibetanus*) の確認例は極めて僅かで、生息状況については判断材料が無いに等しかった。今回、あらためて記録の収集・整理を行った結果、明治時代以降 40 件にのぼる確認例が認められ、近隣地域で連続して確認されている例や複数個体が同時に目撃された例もみられた。こうした確認例は、複数個体が定着している可能性や雌が出産・保育をしている可能性があることを示唆している。近年、東近江市で捕獲された2個体のDNA分析が行われ、その出自がいずれも白山・奥美濃地域個体群であることが明らかにされた。大量出没年にあたる2014年には岐阜県関ヶ原町～垂井町にかけての地域で多くの目撃情報があり、DNA分析の結果とあわせて考えると、これら2個体は関ヶ原地峡を超えて南下し鈴鹿山脈に侵入した個体（あるいはその子孫）である可能性が高いと言える。

鈴鹿山脈におけるツキノワグマの確認例

記録No	年・月	確認場所	状況	備考
1	1882年か1883年頃	岐阜県大垣市上石津町特山	捕獲	
2	明治時代?	滋賀県東近江市政所町	人急事故	
3	戦後	岐阜県大垣市上石津町特山	捕獲	4と同一個体?
4	1950年頃	岐阜県大垣市上石津町特山	捕獲	3と同一個体?
5	1950年頃	三重県いなべ市藤原岳/ホタン岩対岸	捕獲失敗	
6	1970年頃	滋賀県東近江市美川町 下流	捕獲	7・8と同一個体?
7	1970年頃	滋賀県東近江市茶屋川中流	捕獲	6・8と同一個体?
8	1971年12月	滋賀県東近江市政所町	捕獲	6・7と同一個体?
9	1973年頃	釈迦ヶ岳 (三重県三重郡菟野町-滋賀県東近江市)	捕獲?	
10	1976年11月	水島岳 (三重県三重郡菟野町-滋賀県東近江市)	目撃	
11	1977年春	綿内山 (滋賀県蒲生郡日野町)	樹皮剥ぎ	12と同一個体?
12	1978年8月	甲賀市土山町船岡～大河原	樹皮剥ぎ	11と同一個体?
13	1981年か1982年	岐阜県大垣市上石津町特山	目撃	2頭?
14	1983年5月	雲仙山 (岐阜県大垣市上石津町-滋賀県米原市)	樹皮剥ぎ	15・16と同一個体?
15	1984年7月	雲仙山 (岐阜県大垣市上石津町-滋賀県米原市)	目撃	14・16と同一個体?
16	1987年7月	岐阜県大垣市上石津町特山	捕獲	14・15と同一個体?
17	1996年5月	滋賀県蒲生郡日野町原	樹皮剥ぎ	
18	1998年2月	滋賀県蒲生郡日野町原	糞痕施設被害	
19	1999年9月	滋賀県蒲生郡日野町西明寺～原	足跡 (遺尿上)	
20	2001年9月	滋賀県蒲生郡日野町原	撮影	牧場に出没、22・23と同一個体?
21	2002年5月	野池岳 (三重県いなべ市)	熊害	
22	2003年5月	滋賀県蒲生郡日野町原	目撃	牧場に出没、20・23と同一個体?
23	2004年春～6月	滋賀県蒲生郡日野町原	目撃 (複数回)	牧場に出没、20・22と同一個体?
24	2004年10～11月	滋賀県蒲生郡日野町安部西・中在寺・尾西平・西大話・中之郷・柏・原	目撃 (複数回)	親子?の目撃もあり
25	2004年10月	滋賀県東近江市若ヶ塚町	目撃	
26	2004年10月	滋賀県東近江市神田町	目撃	小群
27	2004年10月	滋賀県東近江市神田町	目撃	
28	2004年	滋賀県大上郡多賀町	?	詳細不明
29	2011年7月	岐阜県大垣市上石津町西山 (幾聖台)	目撃	
30	2011年10月	滋賀県東近江市永源寺栢谷町	捕獲	36と同一個体、遺伝子解析、♂
31	2012年6月	滋賀県東近江市永源寺栢谷町	捕獲	遺伝子解析、♂
32	2012年8月	滋賀県東近江市 (永源寺栢谷町?)	目撃	
33	2013年6月	滋賀県大上郡多賀町小原	目撃	
34	2013年12月	三重県いなべ市藤原岳天狗岩	目撃	親子 (小群×2)
35	2014年	滋賀県大上郡多賀町栗塚	目撃	
36	2015年5月～6月	三重県いなべ市北勢町二之瀬→滋賀県大上郡多賀町～岐阜県 (大垣市～養老町～海津町)	捕獲	30と同一個体、糞痕施設被害
37	2015年5月	滋賀県大上郡多賀町桶田	人急事故	遺伝子解析 (マイクロサテライト)
38	2015年6月	滋賀県大上郡多賀町大君ヶ塚	目撃	
39	2015年7月	滋賀県大上郡多賀町菅原	目撃	
40	2015年11月	滋賀県東近江市政所町	目撃	3頭

* 多賀町立博物館

平成27年度多賀町立博物館研究発表会 講演要旨集

発行 多賀町立博物館

〒522-0314 滋賀県犬上郡多賀町四手976-2
TEL:0749-48-2077 FAX:0749-48-8055
<http://museum.tagatown.jp/>
E-mail: museum@town.taga.lg.jp

